

TIRI NEWS

# Eye

Vol.49

有限会社森縫合糸製造所

## 現代によみがえった幻の絹織物 ヤシャブシと泥で染める「黒八丈」

有限会社森縫合糸製造所は、3代にわたって絹糸の撚糸を手がけてきた老舗。獣医師が使う手術用の縫合糸の生産を中心に、草木染の手法を用いた絹糸づくりや服飾小物の企画製造を手がけるとともに、一時は途絶えてしまった伝統的な泥染めの絹織物「黒八丈」を現代によみがえらせた。



渋い色合いで江戸の“粋”を表すものとして、芸者などに好まれた黒八丈。森氏は、反物のほか、巾着袋や鞆、ショールなどの商品化も行っている。

### 既存の技術・ノウハウを活かし 「黒八丈」の復活に挑む

先代までは手術用縫合糸の専門メーカーだった(有)森縫合糸製造所の転機は約30年前。同社代表取締役の森 博氏が、同社が位置する東京都あきる野市周辺は、江戸時代に「黒八丈」という絹織物の産地だったと知ったことです。医療用絹糸製造の次の一手を模索していた同社は、この黒八丈の復活に挑戦。とはいえ、作り方に関する文献は一切なく、ノウハウを聞ける職人も皆無だったといえます。

黒八丈は、養蚕農家が繭玉をつくり、製糸工場が繭を原料に生糸を生産。その後、同社で絹糸を撚り上げます。使用するのは奥行き45mの「張り織り式八丁撚糸機」という希少な機械です。撚糸の後は、ヤシャブシの実を煮出して染料にし、鉄分の多い泥を媒染剤にして染色。化学染料や化学薬品は使わず、染める材料はすべて地元で調達します。染める回数が多いもので20回。2～3年かけて深みのある黒に染め、専門の職人が機織りを行

います。こうして反物になった黒八丈を使い、服飾雑貨などを企画製作しています。

「私がやらなければ誰もやらないと思い、一念発起しました。最初は不安でしたが、糸を撚る技術・ノウハウは蓄積されていたので、多少の失敗は覚悟の上でチャレンジしました。数年かけてヤシャブシと泥の比率や、撚糸条件の試行錯誤を繰り返し、品質が安定する最適なつくり方を確立していきました。近年も都産技研多摩テクノプラザに相談し、特に巾着などの小物の製造工程に適した撚糸条件のアドバイスをいただき、染色性を確認しながら繰り返し糸の試作を行っています」(森氏)

### 愚直なまでに 昔ながらの手法を守り続ける

黒八丈と同様の泥染めは、八丈島の「黄八丈」や、奄美大島の「大島紬」が有名です。中でも黒八丈は特に機織りが難しく、江戸時代には「黒八丈2反で家が買えた」という逸話もあるといえます。しかし、明治時代か

ら大正時代にかけて一気に下火に。海外から1回で糸を黒にできる化学染料が輸入されたことで、20回も染める必要のある黒八丈は廃れていってしまいました。

多くの伝統工芸は、安価で効率的である近代的な手法よりも高コストになりがちです。絹織物に関わる職人も、古い技術を古いまま変えずに継承する難しさに直面し減少。それでも森氏は、「黒八丈はヤシャブシで染める」という旧来の手法を頑なに踏襲し、黒八丈を復活させました。

「黒八丈は非常に手間がかかり、大量生産もできません。単純に糸を黒くするだけなら、黒八丈である必要はありませんが、この地域の素材を使い、この地域の力を結集させる黒八丈にこだわりました」(森氏)

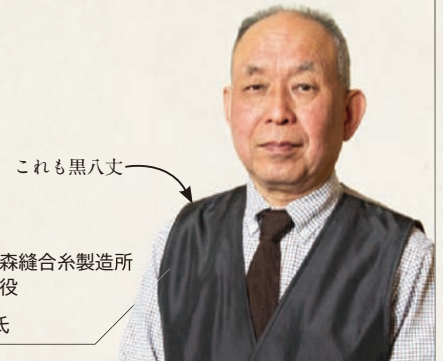
「時代の流れ」によって途絶えてしまったアナログな技術を活かした森氏の気概。デジタル技術全盛である現代のものづくりに向けても、示唆に富んだチャレンジだったといえるはずで



(左)国内でも数少ない「張り織り式八丁撚糸機」。森氏自身がメンテナンスや修理をしながら使い続けている。(右)黒八丈は染めの回数を重ねた分だけ、より深い黒に染められていく。



ヤシャブシの実  
1年に1度、11月の  
中ごろに収穫。天日  
で乾燥させれば4  
～5年は染料とし  
て使用できる。



有限会社森縫合糸製造所  
代表取締役  
森 博氏

会社勤務を経て家業である絹糸製造の道へ。黒八丈のほか、草木染の絹糸アクセサリーや医療用の縫合糸など、多彩なものづくりを行っている。